



小説・演劇

赤江 瀑

下関市
(1933～2012)



下関市立近代先人顕彰館所蔵

【著作】

- 『ニジンスキーの手』(昭和49・角川文庫)
- 『オイディプスの刃』(昭和49・角川書店)
- 『戯場国の森の眺め』(平成9・文藝春秋)

ほか

下関市立近代先人顕彰館(田中絹代ぶんか館)では、小説のほか、演劇関連著作の閲覧もできる。

虚と実のはざまに結界する赤江美学

鮮烈な文学デビューだった。一九七〇年初頭、小説現代新人賞受賞作『ニジンスキーの手』は、五木寛之、野坂昭如らに激賞され、以後次々と『罪喰い』『獣林寺妖変』など発表。『八雲が殺した』『海峡―この水の無明の眞秀ろば』で第十二回泉鏡花文学賞、『オイディプスの刃』(長篇・映画化)で第一回角川文学賞を受賞。華やかで独特の美学ワールドは、横尾忠則や唐十郎らを魅了した。

下関市生まれ、戦時中の強制疎開で菊川町に移住、戦後、旧制豊浦中学校入学、一年後、新制県立豊浦東高校(現田部高校)に編入、のち日本大学芸術学部入学。学生時代は詩誌『詩世紀』などで活躍、注目されていた。帰郷後、菊川町に在住、本名の長谷川敬(たかし)でラジオ・テレビの放送作家として西日本地域で著名だった。明治百年記念脚本募集に応募した『大内殿闇路』が受賞こそ逸したが、最終候補に残った。たぶんこのチャレンジを奇貨として、脚本から小説に舵を切った。美学の旗手、赤江瀑の誕生だった。

長編をふくめて二百五十編以上の作品を華麗に文学界に刻みつけた赤江瀑には、京都を舞台にした作品が印象的で、山口県との由縁が見落とされがちだが、赤江瀑ほど山口県、つまり産土うぶすなの地霊や景勝地を小説世界に映し出した作家は少ないのではないかと。父祖の地が萩でもあり、このことが色濃く反映しないはずはない。筆者は東京・立風書房の出版企画、赤江瀑の山陰山陽小説集『飛花』の巻末エッセーを書くため取材したが、『ホルンフェルスの断崖』『鬼恋童』おにれんどう『原生花』の森のつかさ司』『闇絵黒髪』『サーカス花鎮』はなしずめなど、ふるさとの書割満載である。しかも、行きずりの旅人が刻みつけたものとは異質の味わいがあり、コクが深い。『花帰りマツクラ村』は、宇部奥の万倉の地を望郷する物語だが、吹く風の匂い、土塊の感触、樹林のざわめきなど、県内各所を妖艶な舞台に昇華させている。

(文・武部忠夫)



「泉鏡花文学賞」受賞時(左) (右は古川薫氏)



揮毫石碑(田部高校・玄関植込み)